

特集 高知 〜いごっそうとはちきんの国 土佐〜	Special Features Kochi Country of stubborn men (Igosso) and lively women (Hachikin)-Tosa	ユニークな産業 Unique industries
<h2>街路市と暮らす</h2>		
福田善乙 Fukuda Yoshio	高知短期大学名誉教授	

1——市のまち・高知市

市といってもいろいろな形態がある。市には地域住民を対象とした生活市、観光客を対象とした観光市、その地域固有の産物を販売する産地市、古道具や古美術品を売る骨董市などがある。

また、開催場所で分類すると、建物の中でおこなわれる市場や物産センターなどのような屋内市・施設市、空き地や道路などの屋外でおこなわれる街路市・露天市・青空市がある。開催時間からは、朝市、夕市、終日市などがある。開催頻度も季節ごと、月1回程度、週1回、毎日など多様である。

多様な市があるなか、高知市の市は道路でおこなわれる街路市であり、「日の出から日没まで」を原則とする終日市である。しかも月曜日を除く毎日、市内のどこかで「市」が立っている。高知市は「市のまち」なのである。なかでも日曜市は300年以上の歴史をもち、高知城から東へ1.3kmにわたる追手筋という道路に約500店が出店する、規模としては日本一の市である。

高知の街路市は生活市を基本としているが、日曜市は

■表1—高知市が管掌する街路市（水曜市は管掌外）

項目	曜日		日曜日		火曜日		木曜日		金曜日		土曜バザール	
	日曜日	火曜日	木曜日	金曜日	土曜バザール	日曜日	火曜日	木曜日	金曜日	土曜バザール	日曜日	火曜日
開市場所	追手筋	上町 4〜5丁目	県庁前	愛宕町 1丁目	追手筋							
延長距離	1,314.5m	248.5m	278.5m	233m	180m							
出店者登録数	480	27	60	1	99	11	58	0	75	0		
開市時間	○日曜市は4月〜9月は午前5時より午後6時まで 10月〜3月は午前6時より午後5時まで ○火、木、金曜市は日の出から日没1時間前まで ○土曜バザールは9時〜15時											
開市期間	1月1日、2日を除く通年 (日曜市は、追手筋での“よさこい祭り”期間を除く)											

※「出店者登録数」は、左欄が定時出店者数、右欄が臨時出店者数。
2006年3月末現在。高知市資料より

生活市を基本としながらも、それをまるごと観光資源としても活用する市となっている。2004年の調査による来市者の割合は、高知市内31.6%、高知県内12.2%、県外56.2%となっていることから、生活市であり観光市でもあることが伺える。

高知県内には農産物直販所が2006年段階で107カ所あり、全国でも有数の設置状況である。この農産物直販所や道の駅や海の駅は高知市の街路市が1つのモデルとなっている。

2——街路市のあゆみ

高知の城下町は1601年（慶長6年）からつくりはじめられた。城下町では庶民の経済活動が活発化していき、それに対応する形で近郊農村との交流も促進されていった。そして317年前の1690年（元禄3年）、街路市が藩の法令で公認されたのである。

この起源の根拠となるのは、郷土史家で山内家史編主任であった平尾道雄の調査により、土佐藩第4代藩主山内豊昌が元禄3年3月に制定した藩法『元禄大定目』である。それには「市日、毎月2日・17日朝倉町、7日・22日蓮池町、12日・27日新市町、此定日先規之通、市之商売不可有相違事」とある。

また、日曜市の起源は、この日切市（定日市）が曜市になったことによる。1872年（明治5年）に太陽暦が採用され、1876年（明治9年）に官庁が日曜休日、土曜半休となったことに伴い、これまでの日切市が曜市に変更され、ここに日曜市が誕生したのである。その後、現在の各曜市の形態が整ったのは1926年（昭和元年）のことである。

第2次世界大戦によって休止状態であった街路市は、1948年（昭和23年）に追手筋に日曜市が復活し、その後、場所・規模などを拡大して今日に至っている。

日曜市以外の曜市の誕生は、次のとおりである。

- ・ 火曜市は1926年（昭和元年）上町5丁目電停南の広場に誕生
- ・ 水曜市は1891年（明治24年）公園通りに誕生
- ・ 木曜市は1926年（昭和元年）中島町に誕生
- ・ 金曜市は1926（昭和元年）朝倉町に誕生
- ・ ふるさと交流バザールと曜市（土曜バザール）は2001年追手筋に誕生

3——街路市の特徴

第1に、高知市の日曜市は規模としてはおそらく日本一である。高知城から東へ1.3kmの追手筋に約500店が出店している。この距離の長さや出店者数の多さは他に例がみられないものである。

第2に、出店している業種や品物が多種多様なことである。野菜類などの農産物はもちろん果樹、餅やまんじゅう、すしなどの農産加工物、包丁などの金物、衣料、石やカメ、金魚なども売っている。「日曜市へ行けばなんでもある」といわれるほど品物が豊富である。

時折、高知が海の国なのに生魚がなく塩干物しかないと批判されることがある。これは衛生上の問題もあるが、近くの大橋通り商店街が海産物中心の商店街であり、共存するために出店を制約したことによるものである。

第3に、日曜市は生活市を基本としながら、その生活

■表2—街路市曜市別出店登録数（臨時を含む）の推移

	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
日曜市	627	616	606	594	582	559	553	517	507
火曜市	97	92	86	80	76	65	65	62	61
木曜市	138	135	132	122	120	117	119	112	110
金曜市	88	85	83	77	76	74	66	62	58
土曜市	15	15	14	14	14	10	0	0	0
延人数	965	943	921	887	868	825	803	753	736

※高知市資料より

■表3—街路市の業種別出店登録数

	日曜市		火曜市		木曜市		金曜市		計		総計	割合(%)
	定時	臨時										
農産物(野菜)	191	11	29	1	35	7	24	0	279	19	298	40.5
青果物(果物)	33	0	7	0	19	0	12	0	71	0	71	9.6
農産加工品	66	1	12	0	17	2	7	0	102	3	105	14.3
塩干物	13	4	4	0	6	0	4	0	27	3	30	4.1
植木、花類	87	2	5	0	11	0	6	0	109	3	112	15.2
金物、刃物類	13	0	0	0	1	0	0	0	14	0	14	1.9
古物、骨董品	8	1	0	0	0	0	0	0	8	1	9	1.2
一般食品	23	2	1	0	7	2	3	0	34	4	38	5.2
菓子類	8	0	0	0	1	0	0	0	9	0	9	1.2
衣類、雑貨	38	6	2	0	2	0	2	0	44	6	50	6.8
計	480	27	60	1	99	11	58	0	697	39	736	
総計	507		61		110		58		736		736	

※2006年3月末現在。高知市資料より



■写真1—生活市がまるごと観光資源

市をまるごと観光資源として活用していることである。観光化が進み、品物の質が落ちたり、価格が高くなったりすると地元の人たちがソッポを向くので、それを避けることを旨としている。生活市としての機能を維持するため、1998年の高知市街路市問題検討委員会では、出店者全体に占める農産物出店者の比率を75%程度に高めることが好ましいとしていたが、現在ではこれを少し弾力的に考える必要があるのではないかという意見もでていた。

第4に、街路市による経済的波及効果が大きいことである。高知市商工観光部商工労政総務課『日曜市の経済波及効果分析調査報告書』（2006年2月）によれば、2005年度の日曜市来市者数は80万4,193人、年間購入額は15億9,225万円と推計されている。この日曜市の年間来市者数は、2005年度高知県内観光施設の利用者上位5施設の合計75万人を上回っている。そして、経済波及効果は128億7,228万円となっている。これは2004年よさこい祭りの経済波及効果約71億円と比較しても大きいのである。

第5に、日曜市は県民の雇用の場・仕事の場・生活を支える場となっている。年間の直接購入額15億9,225万



■写真2—生涯現役



■写真3—土佐の乾物は活きがいいよ



■写真4—毎週お祭り



■写真5—サービスも徐々に向上

円を1店当たりになると約314万円となり、出店者の雇用と生活を支える基盤となっている。これを購入する側からみれば、新鮮で安全・安心なものを適正価格で購入することができ、買う側の生活をも支えているのである。

第6に、街路市が人と人との交流の場になっていることである。スーパーやコンビニはコストを最小限にするために、店員などの人件費を削減する。買う側は自由に買い物ができるが、同時に品物について質問することができない。一方、街路市は対面販売のため、いろいろな情報交流ができ、人間関係も豊かになる。これが「おまけ文化」をつくりだし、暖かい人間関係がつけられる。各店舗には顧客が付き、出店者と客が3代に渡って交流する場合もある。

第7に、街路市が子どもたちの体験学習の場＝教育の場となっていることである。保育園や幼稚園をはじめ、小・中・高校生の販売・購買の体験学習の場になっており、最近では大学生にとっても体験学習の場になっている。また、最近では修学旅行生の訪問も増えてきているが、地域の経済や文化を学ぶ修学の場ともなっている。

第8に、街路市は土佐弁が飛びかう場であり、出店者の個性も加わって、土佐の文化や伝統、歴史を学ぶ場となっている。特に県外の観光客からは、街路市は高知の個性が感じられると評価が高いのである。

第9に、高知市の街路市は周辺の商店街と共存共栄関係を保っていることである。現在、近くの帯屋町商店街や大橋通り商店街との回遊性が重視されているが、これが進むことが大切である。また駐車場問題も協力して解決することが求められている。

第10に、街路市から高知城が見通せる風景は「高知城の見える街路市」として有名である。これは借景ともいえ、1つの風物詩であり、高知市の都市の品格を高

める要素ともなっているのである。

第11に、街路市の維持について行政の役割が大きいことである。高知市の商工観光部商工労政総務課には街路市担当者が3名いる。街路市がスムーズに運営されているのは、地域住民の理解や出店者の努力だけでなく、行政の積極的な取り組みが大きな役割を果たしていることである。

4—街路市のかかえる問題

街路市・日曜市は多くの住民に支えられて存続しているが、同時にいくつかの問題もかかえている。

第1に、出店者数が減少していることである。定時の出店登録者数をみると、1970年1,117であったが、1990年963、2000年822、2006年には697となっている。2006年は1970年の62.4%であり、約4割も減少している。この出店者数をどのように維持するのが1つの課題である。

そのため、出店者を高知市内から高知県全体に広げることが模索されている。2006年3月日曜市への高知市内の登録者396、市外149となっており、高知市外の22市町村からも出店されている。これをさらに拡大する必要があるということである。いわば、高知市の街路市・日曜市を高知県の街路市・日曜市にしようとする方向性である。高知市だけでなく、高知県全体の活性化のためにも大切な視点である。

また、街路市が生活市として存続するために、生産農

■表4—街路市出店登録者の年齢別比率

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	計
出店登録者数	4	5	35	137	123	184	51	1	540
比率	0.7%	1.0%	6.5%	25%	23.1%	34.1%	9.4%	0.2%	100%

※団体出店10を除く。2006年3月末現在。高知市資料より

■表5—街路市出店登録者平均年齢の推移

1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度
62.65	63.415	64.18	64.4	64.62	64.97	64.68	65.35	65.96

※1998～2003年度は5月1日現在。2004～2005年度は10月1日現在。2006年度は4月1日現在。高知市資料より

家など第1次産業従事者の存在が大切であるが、出店者全体に占める割合は69.8%である。この割合を1998年の高知市街路市問題検討委員会は75%にすることが好ましいとしていたため、新しい出店者の参入が困難な面もあった。それゆえ、この規定を一定緩和する方向性も模索されている。

第2に、出店者の高齢化の進行である。街路市出店登録者の年齢別比率をみると(2006年3月)、540のうち70代が184(34.1%)でトップである。70代以上をみると、236で全体の44%を占めている。逆に40代までは全体の8.1%で1ケタ台である。こうした高齢化への対応が求められている。もちろん出店者は生涯現役として出店する有利な条件ともなるが、特に若い後継者を育成することが大切になっている。これは出店者のなかから後継者を育成することはもちろんであるが、広く地域(高知県レベル)で後継者を育成することが大切である。

そのためには高知県全体の農業・農村の再生が必要であるし、街路市の歴史・文化を踏まえて、厳しい自然環境条件(雨や風、暑さ、寒さのなかでの出店)の改善に関しては最大限の努力をする必要があり、出店したくなるような魅力ある街路市にしていく必要がある。同時に街路市の経済面だけでなく歴史的、文化的、教育的視点を十分認識した自覚の後継者を育成することが大切である。

第3に、来市者が日曜市に求めるサービスは(2004年)、①休憩所46.8%、②駐車場33.6%、③公衆トイレ24.4%、④荷物預り所16.4%となっている。

ここ数年これらの要請について改善が進んできている。休憩所は空地を利用して数ヶ所設置しており、荷物も宅配便と提携して発送できる体制が整えられてきている。しかし、駐車場の問題などは依然として残っており、商店街との協力も図りながら改善していくことが必要であろう。

5—新しい街路市をめざして

いま街路市が目ざされているのはなぜか。それは、20世紀型の生産や生活のあり方が見直される時代になっているためである。20世紀型の大量生産・大量販売・大量消費・大量廃棄を中心とする生産や生活は、国民に経済的豊かさと利便性を提供し、物的に快適な生活をもたらした。しかし、それは同時に自然や環境の破壊、大量廃棄物の現出という負の側面をもたらし、人間生活に対しても無駄と浪費と使い捨ての生活様式を定着させることになった。

これに対して21世紀に入り、新しい価値観にもとづく生産や生活のあり方が求められている。それは自然・環境・生命・安全・安心・ゆとり・安らぎ・癒し・循環を大切にしたい生産や生活への希求である。自然や環境を大切にしたい本当に人間生活を豊かにする多品種少量生産、3つのR(Reduce、Reuse、Recycle)を大切にしたい生産・生活が求められている。

この新しい生産・生活に対応するものの1つとして街路市が位置づけられる。街路市は地域にある宝物＝自然・環境・生命・歴史・文化・教育・資源・技術・資本・人材を最大限生かしていく視点に立っているからである。

いま「地産地消」「旬産旬消」が大きく叫ばれているのも新しい価値観への要請であり、街路市もその1つの形態である。高知市の日曜市が多くの人たちに愛され続けているのはそこに要因がある。

それゆえ、街路市は未来を切り拓く生産や生活のあり方を提起しているともいえるであろう。

<参考文献>

- 1)「高知市商工労働行政の概要(平成18年度版)」高知市商工観光部、2006年10月
- 2)「土佐の日曜市に関する調査」高知市産業振興部産業振興総務課、2005年3月
- 3)「日曜市の経済波及効果分析調査報告書」高知市商工観光部、2006年2月
- 4)「高知市街路市開設300周年記念・街路市資料集」高知市商工労政課、1991年3月
- 5)福田善乙「地域における街路市(朝市)の役割と地産地消」(高知短期大学「社会科学論集」第80号、2001年3月)